東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

愛着スタイルが対人的葛藤事態における情動に及ぼす影響

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-06-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浜井,聡美, 利根川,明子, 小野田,亮介, 上淵,寿
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108100

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　62: 305－314，2011.

愛着スタイルが対人的葛藤事態における情動に及ぼす影響

浜井　聡美*・利根川　明子**・小野田　亮介**・上淵　寿*

教育心理学講座

（2010年9月27日受理）

1．問題と目的

1．1　「愛着」に関する問題

1．1．1　愛着とは何か

愛着（attachment）とは，人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき（emotional bond）である（遠藤，2005）といわれている。愛着理論の提唱者であるBowlby 自身も，随所で愛着を情緒的絆そのものとするような記述を行っている（e.g. Bowlby，1988）。

しかし，Bowlby が愛着に関して，当初からこのような広義の定義を採っていたわけではない。初期のBowlby は愛着を，「危機的な状況に際して，あるいは潜在的な危機に備えて，特定の対象との近接を求め，またこれを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾向」である（Bowlby, 1969 / 1982）とし，この近接関係の確立・維持を通して，自らが“安全であるという感覚（felt security）”を確保しようとするところに多くの生物個体の本性があるのだと考えていた。

危機あるいは潜在的危機という言葉から想定される心的状態は，当然のことながら，恐れや不安といったネガティヴな情動ということになる（遠藤，2005）。遠藤（2005）が指摘するように，愛着とは本来，特に，ネガティヴな情動状態を，他の個体とくっつく，あるいは絶えずくっついていることによって低減・調節しようとする行動防御システムであると捉えることができる。

愛着研究は，Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall（1978）のストレンジ・シチュエーション法（Strange Situation Procedure，以下 SSP）の開発によって飛躍的に発展した。

SSP は，1 歳児が母親との分離を経験した後の再会場面で，母親に示す愛着行動の表出の仕方によって，母親に対して形成している愛着の質をとらえる方法である。

Ainsworth は，養育者との分離場面における回避行動と再会場面における抵抗行動の組み合わせパターンの違いに従って，乳児の愛着の質を大きく，Aタイプ（回避型），Bタイプ（安定型），Cタイプ（抵抗／アンビヴァレント型）の 3 つに分類するコーディング／スキーマを世に問うた。Bタイプ（安定型）の子どもは初めての場所でも母親がいると安心し，活発に探索を行う。母親がいなくなるとぐずったり泣いたりするが，母親が戻ると再び安心して探索を始める。Aタイプ（回避型）の子どもは母親との分離に際してほとんど泣いたり混乱したりすることがなく，母親と関わりなく行動し，母親の接近を回避したりする。Cタイプ（抵抗／アンビヴァレント型）の子どもは母親との分離に強い不安や抵抗を示し，再開時には積極的に接触を求めるが，なかなか機嫌が直らず抵抗を示す。

Ainsworth らの SSP はその開発以来，様々なサンプルに適用され，これまでに多くの研究成果を挙げてきた。その一方で，近年では，この 3 つだけでは子どもの愛着の個人差を十分に理解しきれないのではないかという見方が大勢を占めつつある（Lyons-Ruth & Jacobvitz，1999；Solomon & George，1999）。

当初からこのような批判は多く，Main & Solomon（1990）はこうした声を受けて，タイプ分けに疑問が残るとされていた子どもについて再検討し，一定のパ

＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）
＊＊　東京学芸大学大学院教育学研究科（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

ターンが存在することを見出し，これをDタイプ（無秩序・無方向型）とした。

現在，ほとんどの愛着研究はAinsworthによるA，B，Cの３タイプにこのタイプを加えた４分類で子どもの愛着の個人差を測定・表現するようになってきている。

１．１．２「成人期の愛着」の理論的背景

愛着という概念は，相対的に無力で，絶対的な保護を必要とする乳幼児期および児童期のみに適用され得るもののように錯認されがちである。しかしながら，Bowlbyは，愛着を，固体が自律性を獲得した後でも，形を変え，揺りかごから墓場まで，生涯を通じて存続するものだと仮定している。

乳幼児期の愛着はSSPによって実際の乳幼児の行動をもとに測定された。しかし，成長とともに，愛着を行動のみから捉えることは難しくなる。

青年期・成人期における愛着の個人差研究には，あくまで過去の親子関係に焦点を当てる正統的愛着研究と，現在の親友や恋人あるいは配偶者等との関係性を話題にする社会人格心理学研究という，大きく２つの流れがある。

前者は主に成人愛着面接（Adult Attachment Interview，以下AAI）をもって愛着の個人差にアプローチする。AAIは，Mainらによる縦断研究のなかで作られた，半構造化された面接手法（Main & Goldwyn，1984）である。AAIでは，被面接者は最終的に，愛着安定のカテゴリーであるF.自律型（autonomous）と，愛着不安定のカテゴリーであるDs.アタッチメント軽視型（dismissing），E.とらわれ型（preoccupied），U.未解決型（unresolved）の類型に振り分けられる。

一方，後者の先駆けとなったのはHazan & Shaver（1987）による愛着スタイル質問紙（Attachment Style Questionnaires）である。それは乳幼児期のSSPにおけるABCの各タイプに対応させる形で，成人の一般的な対人態度についての記述文を３種類提示し，その中からひとつ，被調査者に，自ら最も当てはまる文を強制選択させるというものである。それにより，被調査者は安定型，回避型，不安―アンビヴァレント型に分類される。

このHazan & Shaver（1987）の質問紙は，以後多くの研究に用いられた。しかし，３種類の対人関係の持ち方に関する記述の中からひとつを強制的に選択させるだけでは，細かな個人的特性を抽出するのが難しいのも事実である。そこで，この３種類の記述を基礎に，複数の評定項目からなる多次元的尺度が開発されることになった。

こうした質問紙研究の流れのなかで近年注目すべきものにBartholomew（1990）による４カテゴリー・モデルがある。BartholomewはBowlby（1973）の主張に基づき，自己と他者に対する主観的信頼感の高低を組み合わせて，成人の愛着を安定型，とらわれ型，拒絶回避型，対人恐怖的回避型の４カテゴリーに分類した。本研究では，愛着の類型として，この４カテゴリーを採用する。

安定型は，親密性の回避と見捨てられ不安が共に低い。親密であることと自律的であることを快適とするのが特徴である。

とらわれ型は，親密性の回避が低く，見捨てられ不安が高い。関係を築くことへの欲求と拒否への不安という，アンビヴァレントな特徴を持っている。

拒絶回避型は，他者に対して冷淡かつ時に敵対的であることが特徴である。何かを達成することを重視し，自分は他者以上に価値があるという認識を維持するために人との関係を避けようとする。

それに対して，対人恐怖的回避型は，自分を適切に主張することが不得手で，社会的に不安定であることが特徴である（Bartholomew & Horowitz，1991）。また，人と親密になるのは快適ではないが，他者から認めてほしいという気持ちは強く，人との関係に没頭しやすい。親密さを求めるが拒絶されることが怖いので，結果的に親しい関係を避けてしまうことになるタイプである。

この４カテゴリー・モデルの最も大きな特徴は，従来回避型として同等に扱われていたものを，拒絶回避型と対人恐怖的回避型の２種に岐別するところにあると言える。

この４カテゴリー・モデルを用いた青年・成人の愛着研究が確実に増えつつある。

１．２　「対人葛藤」に関する問題

愛着は特定の他者との間に築く緊密な結びつきであるが，対人関係は必ずしも常に良好であるとはいえない。その代表の１つとして，葛藤がある。葛藤（conflict）とは，個人内葛藤と社会的葛藤とに大別される。そして，社会的葛藤はさらに個人間葛藤と集団間葛藤に分類できるが，特に個人間葛藤を「対人葛藤」（interpersonal conflict）という。対人葛藤は，欧米では，単に葛藤と記述されることも多い。

対人葛藤の概念は研究者によって若干異なり，潜在的葛藤と顕在的葛藤の両方を葛藤として捉える立場と，顕在的葛藤のみを葛藤として捉える立場がみられる。

例えば，藤森（2002）は，「対人葛藤は（中略），個人の欲求や期待などが他者によって阻止されていると個人が知覚するときに生起する対人過程である」と捉え，藤原（1995）は，「２人以上の人々が（中略）相反する成果を得ようとして対人間（中略）に生じる緊張状態」とみなしている。また，大渕・福島（1997）は，「対人葛藤とは他者との顕在的・潜在的対立を含む社会状況である」と述べ，大迫・高橋（1994）は，「対人的葛藤事態とは，二者関係において両者がある事柄に反して相反する方向の欲求や意見などを持ち，それぞれが自己の欲求や意見に従った行動をとろうとすることによって生じる緊張事態である」と考えている。

対人葛藤研究では，対人葛藤が不安や抑うつなどの否定的な情動を喚起することが知られている。

ところで，対人葛藤の当事者は，お互いに自分に有利になるよう葛藤を解決したいと考え，相手に対して働きかける。葛藤の解決に向けての働きかけは，解決方略と呼ばれる。

対人葛藤事態における研究は，対人葛藤事態における情動に関しての研究と，解決方略に関する研究に大別される。

高橋・大迫（1984）や大渕・福島（1997）など，後者の研究は盛んに行われている一方で，前者の研究，特に対人葛藤事態における情動と他の個人要因との関連を検討した研究は少ない。

１．３　対人葛藤事態と愛着

対人葛藤事態での対人感情と葛藤処理方略に及ぼす甘えの影響を検討した大迫・高橋（1994）は，甘え表出の強い者と弱い者との間に４種類の葛藤処理方略（他譲志向方略，自譲思考方略，方向探索方略，状況離脱志向方略）の使用に顕著な差異があり，いずれの解決方略の使用も甘え表出強群のほうが甘え表出弱群よりも多いことを見出した。

ところで，愛着は自律的自己を想定していることから，「甘え」とはやや意味が異なるが，土居も随所で論じている通り（土居，2000），極めて関係が深いといえる。

更に，「甘え」と愛着の関係について検討した玉瀬・今村（2006）の研究では，次のような結果が得られている。すなわち，愛着の安定型は「甘え希求」と「甘え受容」で構成される「相互依存的甘え」と正の相関があり，アンビヴァレント型は「甘え歪曲」と「甘え拒絶」で構成される「屈折した甘え」と正の相関があった。また，回避型は「相互依存的甘え」と負の相関があった。重回帰分析の結果，「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」は愛着の型によってある程度説明しうることを示した。

上記の先行研究から察するに，対人葛藤事態における情動と愛着の型の間には一定の関係があると考えられる。

しかし，前述した通り，対人葛藤事態における情動と他の個人要因との関連について検討した研究は少なく，愛着との関連も検討されていない。そこで本研究では，対人葛藤事態における情動と，成人期の愛着との関連について検討したい。

１．４　研究の目的

以上より，本研究の目的は，成人期の愛着と対人葛藤事態における情動との関連を明らかにし，考察することである。

１．５　仮説

成人期の愛着は，対人葛藤事態における情動に影響を与えるだろう。以下，仮説とその設定理由を述べる。

１．５．１　仮説（１）対人恐怖的回避型は，対人葛藤事態において，苦悩を生起しやすい

Bartholomew（1990）によれば，対人恐怖的回避型は，見捨てられ不安が高い。また，他者から認めてほしいという気持ちが強く，人との関係に没頭しやすいのが特徴である。したがって，対人恐怖的回避型は，対人葛藤事態において，他者との分離を否定する苦悩を生起しやすいという仮説が立てられる。

１．５．２　仮説（２）とらわれ型は，対人葛藤事態において，苦悩を生起しやすい

Bartholomew（1990）によれば，とらわれ型は，対人恐怖的回避型と同様，見捨てられ不安が高く，関係を築くことへの欲求が強いのが特徴である。したがって，対人葛藤事態において，他者との分離を否定する苦悩を生起しやすいという仮説が立てられる。

１．５．３　仮説（３）拒絶回避型は，対人葛藤事態において，嫌悪を生起しやすい

Bartholomew（1990）によれば，拒絶回避型は，見捨てられ不安が低い一方で，他者との親密性の回避が高く，他者に対して冷淡かつ時に敵対的であるという特徴をもつ。よって，対人葛藤場面において，分離の否定というよりは，他者への敵意や非受容的なシグナルをもつ情動を生起すると考えられる。

Malatesta & Wilson（1988）は，嫌悪が，他者に対する非受容的なシグナルとして機能すると指摘していることから，拒絶回避型は，対人葛藤事態において，嫌悪を生起しやすいという仮説が立てられる。

１．５．４　仮説（４）拒絶回避型は，対人葛藤事態において，劣等感を生起しにくい

Bartholomew（1990）によれば，拒絶回避型は，見捨てられ不安が低い一方で，他者との親密性の回避が高く，他者に対して冷淡かつ時に敵対的であるという特徴をもつ。したがって，拒絶回避型は，対人葛藤事態において，相手に対する劣等感を生起しにくいという仮説が立てられる。

１．５．５　仮説（５）安定型は，対人葛藤事態において，すべての負の情動を生起しにくい

Bartholomew（1990）によれば，安定型は親密性の回避と見捨てられ不安が共に低い。坂上・菅沼（2001）では，安定型が他の愛着スタイルに比べてネガティヴな情動（怒り，悲しみ，恐れ）を生起しにくいことを示唆している。したがって，本研究においても，安定型は，対人葛藤事態において，すべての負の情動を生起しにくいという仮説が立てられる。

２．方法

２．１　調査対象

調査対象者は，都内の大学生・大学院生260名（男性71名，女性189名）であった。

２．２　調査内容

本研究は，質問紙調査法による。質問紙は，フェイスシート，愛着スタイル尺度，場面想定法による情動の経験状態の測定尺度の３つから成る。

２．２．１　フェイスシート

調査対象者の性別を記入させるものである。

２．２．２　愛着スタイル尺度

中尾・加藤（2004）の作成したECRの一般他者版（the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version，以下ECR-GO）を用いた。ECR-GOはBrennan，Clark，& Shaver（1998）が開発した尺度を，一般他者を想定した愛着スタイル尺度に改変したものであり，愛着スタイルを構成する二因子（親密性の回避と見捨てられ不安）を測定するための多項目式尺度（30項目）である。「私は見捨てられるのではないかと心配だ」「私は人に心を開くのに抵抗を感じる」等に対し，あてはまる程度を５件法（まったくあてはまらない＝１，あまりあてはまらない＝２，どちらでもない＝３，少しあてはまる＝４，よくあてはまる＝５）で評定させた。

２．２．３　場面想定法による情動の経験状態の測定尺度

大迫・高橋（1994）のシナリオを参考に，葛藤の相手を一般他者（＝Ａさん）に改変し，調査対象者にそれぞれ関係が悪化すると最も辛いと思う人物を想定させた，仮想葛藤場面を提示した（Table１）。そのときの情動の経験状態の測定尺度として，斎藤（1985）が作成した感情項目から，大迫・高橋（1994）が採用したもの，合計30項目を用いた。各項目で表わされた情動を感じる程度を，５件法（まったくあてはまらない＝１，あまりあてはまらない＝２，どちらでもない＝３，少しあてはまる＝４，よくあてはまる＝５）で評定させた。

また，仮想葛藤場面の提示が葛藤喚起の操作として機能しているかを判定するため，葛藤場面での辛さの程度を７件法（まったく辛くない＝１，どちらでもない＝４，とても辛い＝７）で評定させた。

Table1　仮想葛藤場面

Ａさんが大切にしているカメラを借りましたが，うっかり忘れて返すのが一日遅れてしまいました。すると，Ａさんは“約束にいい加減だね”と怒りはじめました。

２．３　手続き

質問紙を個別に配布し，調査対象者は配布された質問紙に対して無記名で回答した。記入された質問紙は，後日，個別に回収を行った。

３．結果

欠損値のあった10名の回答を除外した250名の回答を分析対象とした。

３．１　愛着スタイル尺度

３．１．１　データの数量化

親密性の回避・見捨てられ不安の２尺度の評定結果は，各項目について，「まったくあてはまらない」を１点，「あまりあてはまらない」を２点，「どちらでもない」を３点，「少しあてはまる」を４点，「よくあてはまる」を５点として得点化し，項目の合計得点を各尺度の得点とした。

全30項目のうち親密性の回避に関するものは12項目である。得点範囲は12～60となり，この得点が高いほど親密性を回避する傾向が強いことを示す。全30

項目のうち見捨てられ不安に関するものは18項目である。得点範囲は18～90となり，この得点が高いほど見捨てられ不安が強いことを示す。

なお，全30項目のうち，8項目は逆転項目であるので，「まったくあてはまらない」（1点）を5点，「あまりあてはまらない」（2点）を4点，「少しあてはまる」（4点）を2点，「よくあてはまる」（5点）を1点，として得点化した。

2つの下位尺度の記述統計は，Table 2の通りである。

Table2　親密性の回避得点・見捨てられ不安得点の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
親密性の回避	15	59	35.15	8.68
見捨てられ不安	22	82	50.01	11.14

３．１．２　愛着スタイルの分類

Table 2に示した，親密性の回避得点の平均値（35.15）と標準偏差（8.68）をもとに，平均値から1／4標準偏差を引いた得点以下の調査対象者を親密性の回避低群（$N = 77$），平均値に1／4標準偏差を足した得点以上の調査対象者を親密性の回避高群（$N = 74$）として，群分けを行った。見捨てられ不安得点の平均値（50.01）と標準偏差（11.14）をもとに，平均値から1／4標準偏差を引いた得点以下の調査対象者を見捨てられ不安低群（$N = 72$），平均値に1／4標準偏差を足した得点異常の調査対象者を見捨てられ不安高群（$N = 79$）として，群分けを行った。その結果をTable 2に示す。

愛着スタイルは，安定型35人，とらわれ型42人，拒絶回避型37人，対人恐怖的回避型37人に分類された（Table 3）。

Table3　愛着スタイルの分類

		見捨てられ不安		
		低	高	合計
親密性の回避	低	安定型	とらわれ型	77
		（$N = 35$）	（$N = 42$）	
	高	拒絶回避型	対人恐怖的回避型	74
		（$N = 37$）	（$N = 37$）	
合計		72	79	151

３．２　場面想定法による情動の経験状態の測定尺度

３．２．１　仮想場面における葛藤の程度

仮想場面における葛藤の程度については，平均値は5.21と，「どちらでもない＝4」よりも大きく（Table 4），更に4より低い値をとった調査対象者は少ないことから（Figure 1），仮想葛藤場面として妥当であることが示された。

Table4　仮想場面における葛藤の程度

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
葛藤の程度	1	7	5.21	1.33

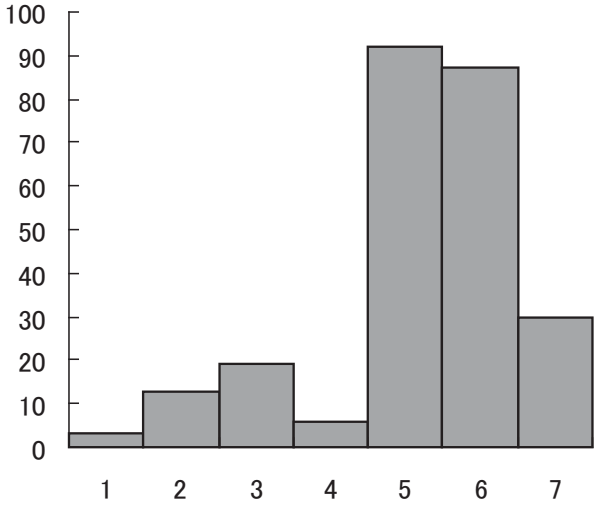

Figure1　仮想葛藤場面における葛藤の程度の度数分布

３．２．２　データの数量化

情動の経験状態の評定結果は，各項目において，「まったくあてはまらない」を1点，「あまりあてはまらない」を2点，「どちらでもない」を3点，「少しあてはまる」を4点，「よくあてはまる」を5点として得点化した。

３．２．３　尺度検討

情動の経験状態の評定尺度を構成する全30項目のうち，床効果が見られた10項目，及び天井効果が見られた2項目については，項目の識別力がないと判断し，続く分析からは除外した。

残りの18項目について主因子法・Promax回転による探索的因子分析を行った。スクリー基準及び解釈可能性から，3因子構造を採用した（Table 5）。いずれの因子についても因子負荷量が.45以下であった項目（5項目）を除外し，最終的に全13項目を，情動尺度を構成する項目とした。

なお，今回採用した因子構造は，情動を5つの因子に分類した大迫・高橋（1994）の研究とは合致していない。

Table5　情動の経験状態の測定尺度の因子分析（主因子法，Promax回転）

No. 項目内容	因子 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
因子Ⅰ：苦悩（α=.88）			
17. 苦しさ	.84	-.01	-.08
15. 悲しさ	.82	.07	-.06
14. さびしさ	.81	.07	-.07
16. 苦悩	.74	-.10	.09
4. 恐怖	.71	-.02	-.02
25. やりきれなさ	.48	-.01	.24
30. 空しさ	.48	.08	.26
因子Ⅱ：嫌悪（α=.75）			
18. イライラ	.05	.80	-.04
3. 怒り	.00	.72	-.10
12. 嫌悪	.02	.63	.09
因子Ⅲ：劣等感（α=.65）			
10. 劣等感	.13	.01	.66
20. 恥ずかしさ	.07	-.21	.62
9. 屈辱感	-.19	.29	.59
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅱ	.11	—	
Ⅲ	.51	.29	—

因子Ⅰは，「17. 苦しさ」，「15. 悲しさ」，「14. さびしさ」，「16. 苦悩」，「4. 恐怖」，「25. やりきれなさ」，「30. 空しさ」の7項目が特に因子負荷量が高かった。よって，因子Ⅰを「苦悩」因子と命名した。

因子Ⅱは，「18. イライラ」，「3. 怒り」，「12. 嫌悪」の3項目が特に因子負荷量が高かった。よって，因子Ⅱを「嫌悪」因子と命名した。

因子Ⅲは，「10. 劣等感」，「20. 恥ずかしさ」，「9. 屈辱感」の3項目が特に因子負荷量が高かった。よって，因子Ⅲを「劣等感」因子と命名した。

それぞれを代表する項目から，苦悩尺度，嫌悪尺度，劣等感尺度を構成した。3つの下位尺度の内的整合性（Cronbachのα係数）は，苦悩尺度が $\alpha = .88$，嫌悪尺度が $\alpha = .75$，劣等感尺度が $\alpha = .65$ であった。

苦悩尺度，嫌悪尺度，劣等感尺度の3つの下位尺度について，各尺度を構成する項目の平均値を尺度得点とした。各尺度得点の記述統計は，Table 6の通りである。

Table6　情動得点の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
苦悩	1	5	3.42	1.00
嫌悪	1	5	2.48	1.04
劣等感	1	5	2.83	1.08

3．3　愛着スタイル尺度と場面想定法による情動の経験状態の測定尺度

4つの愛着スタイル間で，対人葛藤場面における情動の経験状態に差があるかどうかを検討するため，分散分析を行った。4つの愛着スタイル毎の情動得点の記述統計はTable 7の通りである。

Table7　愛着スタイル毎の情動得点の記述統計

		安定型	とらわれ型	拒絶回避型	対人恐怖的回避型
苦悩	$M(SD)$	3.16(.94)	3.73(.77)	2.94(1.12)	3.79(.91)
嫌悪	$M(SD)$	2.26(1.07)	2.32(.93)	2.56(1.14)	2.79(.96)
劣等感	$M(SD)$	2.84(1.10)	2.97(1.05)	2.34(1.03)	3.15(1.02)

3．3．1　苦悩と愛着スタイル

4つの愛着スタイルを独立変数，苦悩を従属変数として，1要因の分散分析を行った（Table 8）。その結果，0.1％水準で有意な愛着スタイルの主効果が見られた（$F(3, 147) = 7.52$，$p < .001$）。

Table8　苦悩の情動と愛着スタイルの分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F	有意確率
愛着スタイル	19.88	3	6.63	7.52	$p < .001$
誤差	129.56	147	.88		
合計	149.43	150			

そこで，Tukey の HSD 検定による多重比較を行った（Figure 2）。その結果，とらわれ型は安定型及び拒絶回避型よりも有意に苦悩が高く（順に，$p < .05$，$p < .01$），対人恐怖的回避型は，安定型及び拒絶回避型よりも有意に苦悩が高かった（順に，$p < .05$，$p < .01$）。

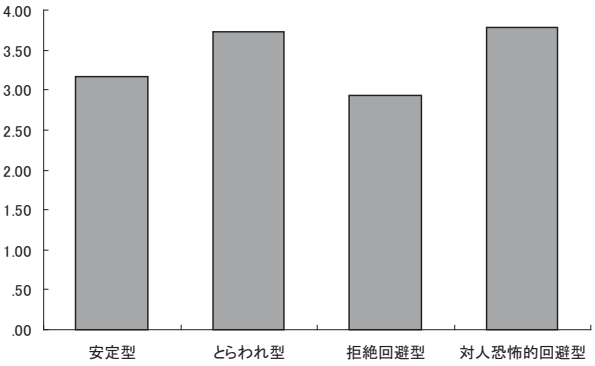

Figure2　各愛着スタイルにおける苦悩の情動[a)]

a）安定型＜とらわれ型*，安定型＜対人恐怖的回避型*，拒絶回避型＜とらわれ型**，拒絶回避型＜対人恐怖的回避型**（*$p < .05$，**$p < .01$）

３．３．４　嫌悪と愛着スタイル

４つの愛着スタイルを独立変数，嫌悪を従属変数として，１要因の分散分析を行った（Table 9 ）。その結果, 愛着スタイルの有意な主効果は見られなかった（F（３，147）= 2.13，*n.s.*）（Figure 3 ）。

Table9　嫌悪の情動と愛着スタイルの分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F	有意確率
愛着スタイル	6.70	3	2.23	2.13	*n.s.*
誤差	154.10	147	1.05		
合計	160.79	150			

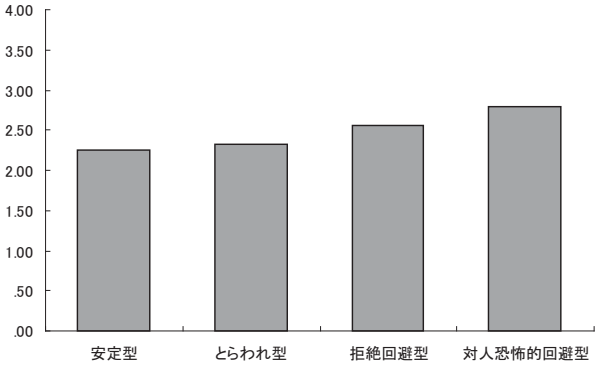

Figure3　各愛着スタイルにおける嫌悪の情動

３．３．５　劣等感と愛着スタイル

４つの愛着スタイルを独立変数，劣等感を従属変数として，１要因の分散分析を行った（Table 10）。その結果，１％水準で有意な愛着スタイルの主効果が見られた（F（３，147）= 4.07，$p < .01$））。

Table10　劣等感の情動と愛着スタイルの分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F	有意確率
愛着スタイル	13.47	3	4.49	4.07	$p < .01$
誤差	162.06	147	1.10		
合計	175.53	150			

そこで，Tukey の HSD 検定による多重比較を行った（Figure 4 ）。その結果，とらわれ型は拒絶回避型よりも有意に劣等感が高く（$p < .05$），対人恐怖的回避型はとらわれ型よりも有意に劣等感が高かった（$p < .01$）。

４．考察

４．１　仮説の検証

結果に基づきながら，仮説が支持されたかどうかを検証する。

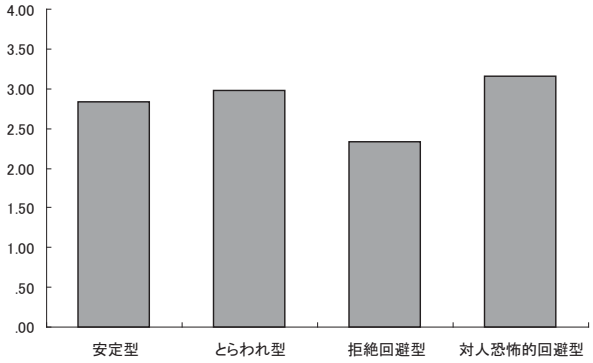

Figure4　各愛着スタイルにおける劣等感の情動[b)]

b ）拒絶回避型＜とらわれ型*，拒絶回避型＜対人恐怖的回避型*（*$p < .05$）

４．１．１　仮説（１）対人恐怖的回避型は，対人葛藤事態において，苦悩を生起しやすい

Figure 2 に示したように，対人恐怖的回避型は，安定型及び拒絶回避型と比して，有意に苦悩を生起しやすいことが示された。よって，仮説は支持された。

４．１．２　仮説（２）とらわれ型は，対人葛藤事態において，苦悩を生起しやすい

Figure 2 に示したように，とらわれ型は，安定型及び拒絶回避型と比して，有意に苦悩を生起しやすいことが示された。よって，仮説は支持された。

４．１．３　仮説（３）拒絶回避型は，対人葛藤事態において，嫌悪を生起しやすい

嫌悪については，すべてのカテゴリー間で有意な差は認められなかった。したがって仮説は支持されなかった。

４．１．４　仮説（４）拒絶回避型は，対人葛藤事態において，劣等感を生起しにくい

Figure 4 に示したように，拒絶回避型は，とらわれ型及び対人恐怖的回避型と比して劣等感を生起しにくいことが示された。よって，仮説は支持された。

４．１．５　仮説（５）安定型は，対人葛藤事態において，すべての負の情動を生起しにくい

Figure 2 に示したように，安定型はとらわれ型及び対人恐怖的回避型と比して有意に苦悩を生起しにくいことが示された。一方，Figure 3 及び Figure 4 に示したように，嫌悪と劣等感では，安定型と他の愛着スタイルとの間に有意な差はみられなかった。よって，仮説は部分的に支持された。

４．２　総合的考察

４．２．１　安定型

対人葛藤事態において，苦悩についてのみ，安定型は，とらわれ型及び対人恐怖的回避型と比して，有意

に生起しにくいことが示された。

坂上・菅沼（2001）は主観的情動経験の頻度と愛着スタイルの関連を検討し，負の情動（悲しみ，怒り，恐れ）について，他の愛着スタイルよりも安定型において有意に生起しにくいことを示している。本研究で用いた苦悩尺度には「悲しみ」の項目が含まれていることから，坂上・菅沼（2001）の悲しみに類似したものを測定しているといえる。したがって本研究の結果は，坂上・菅沼（2001）の研究知見に部分的に合致するものである。

安定した愛着傾向を持っている人ほど，自己と他者についての肯定的な表象が形成されており，対人葛藤事態において他者との分離の危機を回避する自信があると推察される。そのため，他の愛着スタイルを持つ人に比べ，苦悩を生起しにくいのではないか。

４．２．２　とらわれ型

対人葛藤事態において，とらわれ型は，安定型及び拒絶回避型と比して，苦悩を生起しやすいことが示された。この結果は，とらわれ型は悲しみを生起しやすいことを示唆した坂上・菅沼（2001）の研究知見に合致する。

本研究で用いた苦悩情動の測定尺度を構成する項目には「悲しみ」が含まれているが，「悲しみ」の社会的機能として，他者から擁護や共感，援助を引き出すことが指摘されている（Malatesta & Wilson，1998；坂上・菅沼，2001）。Bartholomew（1990）によれば，とらわれ型は，見捨てられ不安が高いという特徴をもつ。よって，対人葛藤事態において見捨てられることを回避するために苦悩を生起しやすいのではないかと考えられる。

また，対人葛藤場面において，とらわれ型は，拒絶回避型と比して，劣等感を生起しやすいことが示された。Bartholomew（1990）によれば，とらわれ型は他者と親密にしたいという気持ちが強い一方で，自分にはその価値がないとする特徴をもつ。そのため，他者から非難を受けるような対人葛藤場面において，ネガティヴな自己観を強め，他者に対する劣等感を生起しやすいのではないかと考えられる。

４．２．３　拒絶回避型

対人葛藤場面において，拒絶回避型は，とらわれ型及び対人恐怖的回避型と比して，苦悩を有意に生起しにくいことが示された。

Bartholomew（1990）によれば，拒絶回避型は，見捨てられ不安が低い一方で，親密性の回避が高い。先述のとおり，本研究で用いた苦悩尺度では悲しみに類似したものを測定している。悲しみは，他者との絆を深める（坂上・菅沼，2001）とされており，拒絶回避型の人にとってはむしろ，対極的な機能をもつと考えられる。よって，苦悩を生起しにくいのではないか。

また，対人葛藤場面において，拒絶回避型は，とらわれ型及び対人恐怖的回避型と比して劣等感を生起しにくいことが示された。

Bartholomew（1990）によれば，拒絶回避型は，肯定的な自己モデルと，否定的な他者モデルを併せ持つタイプである。つまり，自分は他者から愛情や注意を受けるに値するとしながらも，他者に対しては否定的な表象を持ち，時に他者に対して敵対的である（Bartholomew，1990）とすらいわれている。よって，拒絶回避型は，対人葛藤場面において，自分を責めたり，後ろめたさを感じたりすることがなく，劣等感を感じにくいのではないかと考えられる。

４．２．４　対人恐怖的回避型

対人葛藤事態において，対人恐怖的回避型は，安定型及び拒絶回避型に比して，苦悩を生起しやすいことが示された。

Bartholomew（1990）によれば，対人恐怖的回避型は，とらわれ型同様，見捨てられ不安が高い。上述のとおり，本研究で用いた苦悩の測定尺度を構成する項目には「悲しみ」が含まれており，悲しみの社会的機能として，他者から擁護や共感，援助を引き出すことが指摘されている（Malatesta & Wilson，1998；坂上・菅沼，2001）。したがって，対人葛藤事態という他者との分離の危機に直面した際，苦悩を生起することで，見捨てられることを回避しようとするのではないかと考えられる。

また，対人葛藤場面において，対人恐怖的回避型は，拒絶回避型と比して，劣等感を生起しやすいことが示された。対人恐怖的回避型は，自分を適切に主張することが不得手で，社会的に不安定である（Bartholomew & Horowitz，1991）と言われている。そのため，対人葛藤場面において，他者に対する劣等感を生起しやすいのではないかと考えられる。

４．３　今後の課題

本研究では，大迫・高橋（1984）で使用されたものを参考に，仮想葛藤場面をひとつ設定した。そのため，生じる情動が，ある程度固定されてしまった可能性がある。今後，「苦悩」を想定した葛藤場面をひとつ，「嫌悪」を想定した葛藤場面をひとつ，というように，具体的な情動の生起を仮定した複数の仮想葛藤場面を設定することで，信頼性を高める必要がある。

また，対人恐怖的回避型の考察でも述べたように，

同じ対人葛藤場面でも，今回のように自分を否定されるような場面でなければ，違う結果を得ることができたのではないかと考えられる。自分が否定されるような場面ではない仮想葛藤場面も加えて，再度検討する必要があるだろう。

引用文献

相川充 2000 人づきあいの技術 サイエンス社.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of Attachment*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Assoc. 45–64.

Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147–178.

Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology,* 61, 226–244.

Bowlby, J. 1969/1982 *Attachment and loss. : Vol. 1 Attachment*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss.: Vol. 2 Separation.* New York: Basic Books.

Bowlby, J. 1988 *A Secure Base: Parent-child attachment and health human development.* New York : Basic Books.

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships.* New York: The Guilford Press. pp.46 –76.

土居健郎 2000 土居健郎選集 (2)「甘え」理論の展開岩波書店.

Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52,511–524.

遠藤利彦 2005 愛着理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦（編著）アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房. pp.1–31.

藤原武弘 1995 葛藤 小川一夫（監修）改訂新版：社会心理学用語辞典 北大路書房. p.38.

藤森立男 2002 対人葛藤 古畑和孝・岡隆（編）社会心理学小事典 有斐閣 p.154.

深田博己・山根弘敬 2003 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究 広島大学心理学研究3，31–49.

郭穎 2006 子どもの対人葛藤場面における問題解決方略と社会的目標に関する研究の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要 55，331–337.

加藤司 2008 対人ストレスコーピングハンドブック ナカニシヤ出版.

Lyons-Ruth, K. & Jacobvitz, D. 1999 Attachment disorganization : Unresolved loss, relational violence, and lapses in behavioral and attentional strategies. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment : Theory, research, and clinical applications* pp.520–554. New York,: Guilford Press.

Main, M. & Goldwyn, R. 1984 *Adult attachment scoring and classification system.* Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.

Main, M. & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in Preschool Years.* Pp. 121–160. Chicago: University of Chicago Press.

Malatesta, C. Z. & Wilson, A. 1988 Emotion cognition interaction in personality development: A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27，91–112.

中尾達馬・加藤和生 2002 Brennan et al. (1998) の愛着スタイル尺度の日本語版作成とその妥当性の検証 日本教育心理学会第44回総会論文集，300.

中尾達馬・加藤和生 2004“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討九州大学心理学研究，5，19–27.

大渕憲一・福島治 1997 葛藤解決における多目標―その規定因と方略選択に対する効果― 心理学研究，68，155–162.

大迫弘江・高橋超 1994 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究，34，44–57.

斉藤勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究，56，222–278.

坂上裕子・菅沼真樹 2001 愛着と情動制御 教育心理学研究，49，156–166.

玉瀬耕治・今村友美 2006「甘え」と愛着（愛着） 教育実践総合研究センター紀要，15，39–46.

付記　本論文は，第一筆者が2010年に東京学芸大学に提出した卒業論文に，加筆・修正したものである。調査にご協力を賜った皆様に深く感謝します。